

「母殺し」の隠れた犯人である「不在者」は、  
事件の「発端」から「制裁」までも決定していた  
—小説「告白」における母子迷走と河合隼雄の射程に関する覚書—

The Absentee who was the Hidden Murderer of Mothers had Provided  
the Beginning of the Case and the Judgment

A Memorandum of the Straying Mothers and their Sons as the Characters  
of the Novel "KOKUHAKU" and the Range of the Theories of Hayao Kawai

中 島 義 実

Yoshimi NAKASHIMA

(福岡教育大学教育心理学講座)

(平成22年9月29日受理)

要約

小説「告白」における、二人の中学生による「母親殺し」について、近年わが国でなされてきた「親殺し」に関する言説がどの程度有効であるかについて検討した。片田(2008, 2010)がある程度まで有効であるが大きな限界をもち、今なお河合隼雄(1977, 1978, 1980, 1983, 1992等)の射程の方がことに届いているという結論をみた。河合の所論について、今後なお読み込まねばならない点があまることが示された。

キーワード: 「告白」, 母子一体化, 母殺し, 父性, 河合隼雄

1. 学校という劇舞台

惨劇の舞台は学校である。

しかし小説や映画の世界では、もう、そのことだけで誰を驚かせることもないのだろう。

あらためて思い慄然とするのは、この、誰も驚かないことの方だ。

もし自分がこの学校に勤務する一教師だとしたら、どう感じどう振舞うだろう。衝撃とか遺憾とかいうような言葉ではすまないことだけは間違いない。現実感などたやすく危うくされたであろう。

ところが小説や映画となると、凄惨な殺人と復讐劇の舞台としての学校、という設定を自然に受け入れ、その先に展開される、予想を上回る何ごとかを待ちつつ読んでいる自分がある。そこに明かされる何かを求めて。

学校とは今や、そのような舞台としてたやすく

イメージできるものとなっている。普遍的な設定となりつつあるようにさえ思われる。映画, 小説, アニメ, マンガ…。

学校とは、人間の隠しもっている様々なことごとが露わにされていく、格好の舞台なのかもしれない。あたかも実験室のように。

本当に実験室なのかもしれない。複雑怪奇な現代社会に生れ落ち、次々に押し込まれてくる新情報を咀嚼する術を得る機会も「便利」「快適」の名のもとに奪われ、自分でも何を思っているのか分からない、年端もいかぬものたちが、わずか1人の担任で把握できるはずのない単位の数で、互いに何の脈絡もない者どうし、一定空間に集められ、居させられ、共通作業を指示される。法の支配も十分には及ぶことのない制度下で、少なくとも個々人の体験する内的現実の世界では、予測不可能な惨事がいつどのように起きても不思議で

はない。そんな危険な空間が、あまりに素朴にそこにある。「いじめ」はすでに、それだけでは惨事とはみなされない。存在が予測不可能ではないことがようやく認識されたからだ。「いじめ」はもとより「常にある」ものなのだ。「想定内」に、ようやくなったのだ。

いつのころだったろうか。青年たちの振る舞いの外観が平穏化した状況を、質問紙への評定をあまりに素朴に信じてか、「青年期平穏化説」を唱え、「疾風怒濤はもう古い」などと語られていたのは。何も見えていなかったのだ。

バブル期でさえ、青年たちの内的現実には疾風怒濤であった。疾風怒濤を自ら認められないぐらい脆弱な世代だったのだ。学生時代、周囲とともに、消費への強迫の渦に巻き込まれて抵抗もできず、作り笑いで繕い合わねばいつ指弾されるかわからないと怯え合う、過敏で不細工な自意識を抱えたお互いだったのを想起する。大人たちは飛び交う金品に目がくらみ、そのことすら見えなくなっていた、それだけのことなのだろう。

もしも本当に平穏化していたなら、学校を舞台とした文芸等の作品は、荒唐無稽以外の何ものとしても受け取られないはずである。内的現実にはさえ違和しか感じさせられないものが、人の心を打つことはない。平穏化説はこの間の現象を「説明」することすらできないでいたということになる。

内的現実を捨象する学知とは、そういうものとなっていくのだろう。

学校について、親や子について、自分は何を言うことができているのか、省みることを忘れずにいたい。

分野を問うようなことではない。臨床心理学ならば内的現実を見ているとかいう安易な話とは全く異なる。臨床心理学全体としては、むしろそれを自ら捨てようとするかに見える、否、そう見せようとしているかのような愚行が近年目立つ。基礎研究者の方がはるかに内的現実を見ている場合もある（そうでない場合ももちろん多い）。能書きから集合的に捉えた弁明は、ここでは無効なのだ。内的現実のことなのだから。

## 2. テキストとしての覚書

学校を舞台とした殺人劇としての小説「告白」（湊，2008）が本年映画化され、それに伴い文庫化された。本稿は、この作品に触発されて描かれたひとつの内的現実を書きとどめおこうとするものである。

ラカンやフロイトを引くまでもなく、言葉は常

に、自らを語り損ねている。真実としての実体があると考えようが、構成体にすぎないと考えようが、言葉がそれを語ろうとするとき、必ずこぼれ落ちるものがある。典型的現象がみられるのは、自らを語ろうとする、モノログにおいてである。社会的望ましさによるバイアスなどというような生易しい次元のことではない。「語り」ということそのものが、そういう性質のものなのだ。「言語にする」プロセスそのものに、「どれを語らないことにするか」という機制が組み込まれている。もとより言語というものの自体がそのようなものなのだ。文科系の学知では、相当以前から共有されている基礎的認識である。

職人は我知らずそれを心得る。この作品の文庫版には、映画化した監督へのインタビューが掲載されている（中島，2010）。「本作は全編モノログで構成されていますから、一見、全員が自分の真情を吐露しているように見えます。しかし、彼らが真実を話しているという保証なんかどこにもない」「その中には本人がわざと嘘を言ったり、本人すら気づかない嘘がまじっていることもあるわけです」。

手練れの映画監督は、モノログを元に人物造形をしようとしはじめるや、「語り」のもつ「騙り」性に気づくのだ。作業の知である。

「何も付け加えず、そのままずっと出すと、余白の部分は見た人が自分で色々補完してくれるんですよ」。これもまた、「テキストの自律性」として、文系諸学で共有されているところである。「書かれていない部分」に触発されるボリュームが大きく、多様であること。力ある豊かなテキストの条件である。

そのようなテキストに各自が触発され、各々の内的現実がつくられる。そして再びテキストが書きかえられてゆく。各々に。

各々とはいえ、声と同じく、響きあうことが可能である。そのようにしてテキストが、新たに書かれ、また読まれる。

本稿は、そのような意味での、本作品に触発されて生じた、ひとつの内的現実の覚え書きである。これもまたひとつのテキストである。

## 3. 殺しをなさしめたのは誰か

あらためて、人が「悪」と手を組むときとは、と考える。どのような力がはたらくのだろうか。

「そうするしかなかったのだ」。事件の犯人がしばしば語る。「そんなはずはない」「とどめられた

はずだ」「なのになぜ、犯すことを選んだのか」。コメンテーターが殊勝な顔を作って語る。しかしこのときの犯人の言葉には、案外真実なのではないだろうかと感じさせられるところが時にある。

他者を殺そうと思うとき、思うように殺すイメージが浮かんでしまったとき、それが不可能でないと思えてしまったとき、人は自らを、生殺与奪の権能を一挙に手にした万能者のごとくに感じられるのかもしれない。

それは果たして、自らが熟慮し選んで手にするような性質のものなのだろうか。万能感を求めることと、睡眠を求めることと、根本に違いがあるのだろうか。基本的に我々は睡眠欲に勝つことはできない。同じように、殺人によって万能感が手に入る、たまたまその機会を得てしまったとき、人は、その欲求に勝つことができるのだろうか。

この作品を読むことは、この感をいっそう強いものとした。

二人の少年の最初の殺人は、担任教師であるシングルマザーの娘の殺害であった。同床異夢のものであったのだが、各々に万能感欲求に動かされていたところがほの見える。

殺された幼女の母、即ち担任教師が職を辞して少年たちに復讐を仕掛ける。この復讐においてもまた、全てをコントロールすることへのあくなき欲求に動かされたかのような語りでことが進んでいく。

復讐は、最終的に、二人の少年それぞれに、意に反して母親を殺させることで完遂する。

では、どうなのか。少年たちの万能感欲求と、元担任教師の万能感欲求とが戦って、担任教師のそれが勝った。そのような話なのだろうか。そんな貧しいお話なのか。

元担任は、むしろ多くを失ったままであるようにみえる。映画化にあたり、最後を締めくくる元担任の科白に、さらに一言が付加された。あの言葉。「なあってね」。あれは、あまりにことが空虚である、そのことを指したものではないのか。

そもそも、「誰かが勝った」のだろうか。

担任も、少年たちと同様に、欲求に動かされたのではなかったか。

勝ったとすればどの人物でもない。欲求が、人間たちに、勝ったのだ。

ではその欲求とは何なのだろう。単なる、殺人による万能感欲求ということなのか。

それで終わるような甘い話とは思えない。

どのようなことで、万能感を求めさせられるようになったのか。それこそが、結果を「殺し」へ

と、共通に引っ張って行ったのではないだろうか。共通のことに引っ張られていたからこそ、あれほどに見事に絡み合い、同型の完遂へと動かされていったのではないのか。

二つの母殺し。犯人は一見、少年たちである。

しかし少年たちは、元担任の復讐心によって動かされていた実行犯に過ぎないとも言える。

では主犯は、元担任か。しかし彼女も「動かされていた」のだ。

少年たちをして自らの母親を殺めさせたものと同一のものによって、復讐者へと仕組まれていたのだ。

主犯は彼女でもない。

少年たちが母を殺す過程に入ったとき、引き金を引いていた共通の「不在者」がいたではないか。

元担任が復讐を決意する羽目になったのも、同じ「不在者」ゆえではないか。

そもそも発端の事件である、少年たちによる、担任の娘である幼女殺し、これさえも、「不在者」の振る舞いに遠因があったではないか。

そうでなくてかように見事に、同型の殺しが組み重なることがあるであろうか。

三人に共通の不在者がいた。それが同型の殺しを連続せしめた。

このような「共通して動かす力」を描き語ることのできる学知があるだろうか。あるとしたら、どのようなものだろうか。

#### 4. 第一の母殺し

「親殺し」というテーマでは、芹沢（2008）が、そのものズバリのタイトルで近年世に問うている。実際の親殺し事件に数多くあたったの考察である。

「親が子を殺したから、子が親を殺したのだ」という。「子を殺した」とは、要は、適切な養育をせず、圧迫を加えたり、過酷な状況におき続けたりしたことを指す。「親は仕返しとして殺されたのだ」という理屈である。そしてそうならないために、「子殺しをしてきた自分に気づいて、子殺しを反省し、子どもに謝って、子どもの受け止め手」になることを勧める、慙愧の心をもちつつ、「甘え・依存」の機会をあらためて与えることだ、と唱える。

一方精神科医である片田（2007）は、同じく各種の事件を対象としつつも、自身の臨床経験や精神医学の諸理論を援用し、たとえば、「幼見的愛着及び依存」から脱することができないことがむしろ、ある種の母親殺し事件に共通していると指摘する。



そうなると、芹沢の提言はむしろ逆に、ある種の親殺しを促進しかねないということにもなる。両者は相反しているともいえる。

親殺しを正面から扱ったものとして近年の我が国で目についた2つの学知(芹沢, 2008, 片田, 2008・2010)は、では、「告白」の2少年の親殺しを「動かした力」を、どこまで描き語ることができるのか。試みてみる。

小説冒頭で2少年を告発した担任教師の用語にしたがい、二人を、A、Bと呼ぶこととする(小説全体の中では姓名が与えられている)。

Bの方から見ていきたい。構図が見えやすいからである。時系列的にもこちらが先に起きた事件である。

Bは、姉の観察によれば、「父親ゆずりの」弱さをもった少年である。Bに初恋をしたクラスメートの女生徒もまた「ほんの少し、心が弱いんです」とBを語る。

しかしBの母は、自らが生育した家庭を理想とし、自らの母親が弟に対してしたように、「常に自信を持ち、自分の意志をもって行動できるよう、小さなことでも褒めながら」見守りつつ育てたのだと言う。Bのおじにあたるその人物が、「世界を舞台に活躍」するエリートビジネスマンとなったからである。

また、夫が「何の煩いもなく仕事に没頭できるよう、家庭内の揉め事は必ず自分で解決するように努めて」もきた。

そのように育てられたBは当初「自分は頭がいいし、スポーツもできると思っていた」。しかし本人が語るように、小学校中ごろには、それは母の願望に過ぎず、どんなに頑張っても「中の上」くらいにしかねない自分というものに気づく。

しかし母は、小学校時の唯一の賞状である書道の三等賞を額縁に飾って知人に自慢し、また、「さすがに中学になると」その自慢はしなくなるが「優しい」を「連発」するようになる。成績上位者を評価する学校に、成績だけを評価するなど文句を言うが、B自身は、もし自分が上位だったら母はそうはしなかつたろうことに気づく。母はあくまで、「優秀なわが子」像にすがりつこうとする。なのにその「優秀」な点として「優しい」しか言わないのは、「母の願ったような優秀さではないのだ」との思いをBに抱かせる。「みじめ、みじめ、みじめ…」と。

このような事象の根底として片田がまず位置づけるのは、子どもが最初に母という他者のまなざしを意識し、その欲望を満たそうとし、その期待

に沿った行動をとろうとする、ということである。期待にこたえることができているという「甘やかな満足感」を子どもがもつことができているとき、母子一体化した万能感を、一体化した母子が共有している状態となる。しかしBは小学校半ばにして、母の期待に応えることができそうにない自分を知る。片田によるなら、これは、自己愛の傷つきによる万能感喪失の過程であり、大人になっていくために必須のプロセスの一段階である。

この万能感「喪失」の過程について片田は、Elisabeth Kübler-Ross (1969)の「死の五段階」説、すなわち「生命の喪失」を受容するに至る過程の理論をモデルとしつつ、説明する。「否認」、「怒り」、「取り引き」、そして「抑うつ」を経て、「受容」に至るというモデルである。

命であれ健康であれ愛する人であれ、「喪失」の可能性を知るとき人はまず、まさか、嘘だ、そんなはずはない、と「否認」する。しかし次第にそれが間違いではないことを思い知るにつれて、今度は「どうして私なのか」「どうしてあの人じゃなく私の身に起きねばならないのか」と「怒り」の感情が噴出する。このとき、激情や妬みから恐れ、いたずらに他罰に走り、見当違いにあらゆる方向に怒りをぶつけまわることもある。しかしそれも虚しいと知り、死ぬのは仕方がない、しかしせめて何かを代わりにして死を引き伸ばしてもらおう、と、たとえば神と「取り引き」する。日本であれば、「家」とか「世間」のために「何でもしますから」となるであろうか。それでもいよいよ喪失の現実が差し迫って感じられ、否定できないと知ったとき、喪失ということそのものに反応して「抑うつ」に、また、死の場合などには、この世とそして愛する者たちと別れなくてはならないという「抑うつ」に、足を踏み入れることになる。しかしこの「抑うつ」の中に浸り続けることによって、次第にいつしか「喪失」を、自らのこととして「受容」できるようになる。「死の五段階」とは、大略このようなモデルである。

するとBは、4段階目の「抑うつ」に、不本意ながらも足を踏み入れることができかけていたとも言える。

けれどもBの母は、片田の言う母子一体化幻想の中での「パーフェクト・チャイルド」としてのBを失うことをみとめたくなかった。Bの挫折を否認するために成績評価に文句をつけ、血眼になって探しあてた、わずかな美点ばかりをひたすら繰り返して自他に言い寄せた。「優しいんです」「優しい子なんです」。

もっともB自身も、みじめな自己像をきちんと引き受けることができていたわけではなかった。同学年の男性教師から、ふてくされやすく、小さな叱責でへそを曲げることを指摘されると「言葉の暴力に傷ついた」と漏らさずにはいられない。むしゃくしゃした気分でご知らず「死ね死ね死ね」とノートに落書きしていたところを隣席のAに見咎められ、Aの殺人計画に組み込まれていくことになる。

頭脳明晰なAは、Bのもっている万能感欲求と、喪失感、しかしできれば喪失を否認したい感情に巧みにつけいり、事件の目撃者に仕立て上げるシナリオに乗せることに成功する。自らの電気技術を駆使した作品「殺人マシン」で殺めるターゲットをBに選ばせる。「こらしめるだけ」と騙して。そして担任の娘である少女を選んだことを褒めちぎる。Bは幻想の中の万能感を取り戻す。殺人計画とは知らされないまま意気揚々と計画を進め、実行を迎える。巧みに設定された冬のプールサイドという予定地点で、少女が「殺人マシン」に触れて感電、宙に浮いて倒れて動かなくなる。驚愕したBに、Aは、殺したのだ、と告げ、何も知らずに騙されたBに対しては「君はあきらかに人間の失敗作」と告げる。Aがなぜこう告げねばならなかったのかは後に考察するが、万能感に浸っていたBの思いは突き落とされる。「失敗作」。この言葉がこの後のBを強く支配することとなる。

ところが少女は死んでいなかった。気絶していただけだったのだ。殺人に関与したことを知られるのを恐れたBが、溺死に見せかけて難を逃れようと、プールに放り込むべく抱き上げたその腕の中で、少女は目を覚ました。だがBは、少女をそのまま冬のプールに放り込んだ。その瞬間、Bに湧いたのは、自分は、Aが失敗した殺人に成功したのだ、という力感であった。失敗に気づいていないAへの優越感に、心底からの歓喜があふれた。万能感がよみがえる。「笑いかみ殺すのに、必死だった」。

ところがこれも、担任が退職直前のホームルームで、名指しこそしなかったものの事件のことを語り始めるや崩壊し、クラスメートから犯人と感づかれるや「もうおしまいだ」「殺される」との思いが全身を駆けめぐる。担任は、法の裁きの諸制度が結局少年たちに本当の現実を突きつけていないことへの怒りから、自らの手で復讐をと、HIVに感染している内縁の夫の血液を、AとBの飲んだ牛乳に混ぜておいたと告げる。驚愕したBはただ「死死死死…」との恐慌の中に陥っていく

よりほかはなかった。

引きこもりとなったBに対して、しかし母は、「引きこもりの原因が家庭にあるとすれば」Bは絶対に「引きこもり」ではない、と、母子一体化幻想の中の万能感になおすがりつく。家族へのHIV感染を恐れたBの洗浄強迫を「罪の意識にさいなまれて」と意味づける。「今日も命がある」ことへの感激のあまり涙を流して菓子を食べるBを見て、お菓子を食べることももうできない元担任の娘を思っただけの涙だ、と解釈する。美化による否認をひたすら続ける。悪いのは全部元担任である、と他罰的に事態を解釈しつくそうとする。

他方でBは、HIV感染によって母を失う、あるいは殺人を知られることで母を失うことを恐れて、さらに閉じこもる。新担任が家庭訪問に来て以降は、学校に連れ出され処罰され殺される恐怖にもおびえねばならなくなる。

風呂にも入らなくなったBの殻を破ろうと、母は食事に睡眠薬を混ぜてBを眠らせ、髪を切る。向き合うことなく、一方的にコントロールしようとしたのである。当然ながらBは更なる恐慌に陥り、ついに殺人を母に明かす。母さえ一緒なら、やり直せると思ったのだ。芹沢の言う、依存への望みだったのかもしれない。

しかし母は、我が子が殺人を自白してしまったことで、「パーフェクト・チャイルド」の喪失を否認できない事実を思い知った。そうってしまった以上、とる道はこれしかない、と、無理心中を試みる。「死の五段階」理論で言えば、「取り引き」の段階であろうか。「死んで償う」ことで、美しい母子像の喪失を埋め合わせようとしたのだろうか。

このことは、自らを受け入れ支えて警察に行きやりなおしをさせてくれる、というBの求めには不可解なことであった。Bは抵抗するが、母に抱きしめられると、「母さんといっしょなら、死んでもいいような」気持ちも湧いた。そのままいけば、最後まで母子一体感幻想を保ったまま、「取り引き」でもあり、美しくとどめる「否認」のようでもあり、しかし「家族に先立つ」という隠れた他罰性も含みつつの、きわめて日本的な心になったであろう。しかし、それを許さないものが立ちはだかった。

偶然なのだろうか。最後に母の口から、Bの子育てに「失敗」した、という言葉が出てしまったのは。この言葉を耳にした瞬間、Aによって万能感から一気に引きずりおろされたときの感情にタイムスリップしてしまったBは「僕は失敗作なん

かじゃない」との強烈な否認感情に心身を乗っ取られ、パニックの中、気づいたら母を刺し殺していたのだ。

こうみると、片田の所説の描き出しているところがかなり多くを語り得ていることに気づく。芹沢ならば、最後のところで母がBの依存欲求に気づき、受け止めてともに歩むべきだったと言うのだろうか。けれどもBの求めたやり直しは、果たしてどんなものだったのだろうか。殺人の現実や、常に付随していた万能感喪失を逃れようとしていた自分という現実を引き受ける、という意味でだったのだろうか。「ゾンビになった僕までも受け入れてくれている」という錯覚にとどまらせる「受け止め」は、あくまでも母子一体化幻想の中でのことである。現実の中に降り立つことをむしろ困難にするのではないか。後に整理して検討したいが、無際限な受容は、むしろさらなる地獄の反復への第一歩である。

そもそも、ある意味で、母はBに歩み寄って受け止めているのではないか。一緒に死のうと。だからこそBも、それでもいいような気持ちになったのではないか。そのままいけば、ある種古典的な心中として、ひとつの救いの物語となる。私たち歴史的に共有してきた「物語」の鋳型。なのにそうはならなかった。それはなぜか、芹沢の所論では語りえない。

では片田はきちんと語り得ているだろうか。母子一体化幻想による万能感を共有することで何に陥るか、「死の五段階」を適用した所論は、Bと母とに起きたことをかなり語り得ている。さまざまな否認や他罰が満ち満ちていた。母子一体化幻想を守るための心中も語り得る。

けれど、なぜ最後が母殺しになってしまうのだろうか？成立しそうなようになった心中を阻んだのは、「失敗」の語であった。「パーフェクト・チャイルド」を喪失した母の「抑うつ」段階に入ろうとする言葉だったのかもしれない。けれどもそれは、Bには受け入れがたいことだった。せっかく一体化した万能感の中で幕を引くことに同意しかけたのに、万能感そのものを否定する語を聞いてしまった。それだけは否認しなければいけない。そこまでは分かる。

しかしなぜ、結果が母殺しなのだろうか。パニックの中暴れまわって、気づいたら母を刺していた。ただそれだけの、物理的な事故だということだろうか？だとすれば、この結末に胸を打たれ、また、元担任の執念の臨在感さえ感じた読者は、相当な間抜けだということになる。そもそも物理的事故

をわざわざ描いたのだとしたら、作家自身からして間抜けではないか。単なる事故ではありえない。何かをもたらした必然なのだ。少なくとも、何らかの必然なるものと響きあうものをもっている殺害なのである。偶発的な単なる頓死に胸を打たれる読者はいない。

片田は論じたであろうか。母殺しの必然ということについて。

このような所説を提出している。いつまでも母の欲望を満たそうとしてとらわれたままの少年が、思春期になってもそうである場合、とらわれたままだからこそ、そこからの「究極的な脱出」のために母殺しをするのだ、と。いくつかの実際の母親殺し事件の分析から、そのような構図が浮かんだようである。それらの事件がなんらかに「脱出」を企図したのだという構図は分からなくはない。少年たちの事件後の言動から母親への憎悪があったこともうかがわれる。とらわれが大きかったからこそ、脱出に際して、「殺さない逃げられない」との思いが動いた。そう解するなら、理解できなくもない。

けれどもBの場合はどうだろうか。たしかに多少、自らの限界に気づき、「抑うつ」に踏み入るところまで来てはいた。自然に訪れてきていた、自立への小さな芽になりえたものだったのかもしれない。しかしそれは、たやすく幻想的万能感に引き戻されるほど、まだか弱く小さなものであった。

そもそもBは、脱出しようとしていたのだろうか。母を殺さないで脱出できない、として動いたのだだろうか。Bは母を、失いたくなかったのではないか。心中を受け入れるときも「母さんと一緒なら」。そして母の死を悟るや、「待って、母さん！僕を置いていかないで！」。どこまでも、母と一緒にいたかったBなのである。脱出のための殺しではありえない。

こうなると、芹沢の所論にも言い分が生じてきそうである。Bは母に依存したがっていた。

けれどもBが抱いていたのは現実との接触面を欠いた幻想であった。芹沢はそこを語っていない。

Bの思いのプロセスと、必然のように感じられる母殺しという結果と、双方を語ろうとするとき、どちらの論者に依拠しても、足りない部分の残る語りになってしまう。母殺しに、必然という響きが伴うことを、奏でられる学知が必要となるのである。

そして、そもそも、この母殺しは、Bだけの手によるものだったのか。



隠れた主犯はいないのか。

## 5. 第二の母殺し

少年Aの母親殺しについてはどうであろうか。

事件当時、少年Aは再婚した父の連れ子であり、後妻からみれば継子である。実の母は、Aが10歳のとき、Aへの虐待を理由とした調停で離婚となり、Aを父の元において、家を出たのである。

しかしAの実母への思慕はとても強いものであった。

そもそも実母は独身時、優秀な科学研究者として将来を嘱望されながら、スランプ時にたまたま学会で出かけていた地方都市で事故にあい、救出してくれたその街の男性と結婚、Aを産んだ。しかし実母の研究者としての思いは、地方都市の電器店主の妻に納まることを潔しとさせてくれなかった。寝物語のように幼少のAに科学理論を語り聞かせ、みるみるそれらを消化吸収していくAの才能を愛した。実母のそのまなざしに答えること、つまり科学に秀でることで、Aは実母と一体化することができた。実母はたしかに「あんたさえいなければ」研究者になれたのにとAに手を挙げた。しかしAは必ずあとで泣いて謝る実母を憎むことはできず、むしろ、尊敬する実母の自己実現の妨害となっている自らを呪わしく思うようになる。

ここでも、特殊な形であるが、母子が一体化した万能感の幻想世界が共有されている。母子それぞれが、その世界を守ろうとする。Aの自虐は一見痛ましくさえ見えるが、自分が死ねば母は才能を存分に発揮し夢をかなえられる、としてヒロイックな自殺を考えつつ、けれども「醜くみっともない」死に方を徹底して避けるそれは、自己愛以外の何ものでもない。それも、実母以外の人をみな、生きていても価値のない「馬鹿」とみなす、強烈なものだったのである。この自己愛でもって万能感の幻想世界を生きる。そのことでAは、「怪物化」したかにみえる。

それでも、Aにも機会はあった。

再婚した父の後妻の等身大の生き方に敬意を感じ、カラオケやボウリングに3人で出かけたりしているうちに「自分が馬鹿になっていくような気がしたが、馬鹿は意外と心地よく、このまま馬鹿一家の一員になってもいいと思う」ようになっていたのだ。

しかしそれは破られる。父の再婚の半年後、実父と継母の間に子どもができるや、「赤ちゃんが泣くと、邪魔になっちゃうでしょ」との理由で自分の部屋を追われ、たまたま空いていた亡き祖母

の旧宅に「勉強部屋」をあてがわれたのだ。「小さな泡が一つ、パチンとはじける音がした」。Aは述懐する。

以降Aは、勉強机を運ぶのに軽トラを使わねばならないほどの距離に設けられた一人きりの空間の中で、実母の残した世界にのめりこむこととなる。実母が「中学生になったら」と買い与えていたロシア文学などの書籍に親しむと「遠く離れた母親と、時間を共有しているような気分になれた。それは、孤独な自分の、ささやかな幸福の時間だった」。

そして電器店の倉庫でもあったその家屋に眠っていた廃棄物等を素材にして、持ち前の科学知識を生かして様々な「発明品」を拵えていく。傑作品への同級生の反応はしかし、Aの自己愛を満たしてくれるものではなかった。結局実母以外には、自分の才能が分かるものはいないのだ。この、自己愛喪失の否認が、さらに幻想世界を膨らませていくことになる。発明品をWeb上に載せれば実母からのアクセスがあるかもしれない。しかしサイトを好事家に荒らされただけに終わる。発明コンクールで上位入賞すれば実母は目に留めてくれるだろう。しかし思い通りに入賞した表彰の日に起きた猟奇的少年事件のニュースに、Aの入賞ニュースはかき消される。殺人でないと、目に留めてもらえないのだ。そうさとしたAは、実母に駆けつけてもらう手段として、殺人を計画する。そしてBに選ばせたターゲットを殺した。つもりであった。

このときAはなぜか、Bに「人間の失敗作」との言葉を吐き、Bからの逆襲をかうことになった。なぜわざわざ、ここでこう言わねばならなかったのだろうか。

もともとAの自己愛は、実母以外は全員馬鹿と見下すこと、すなわち幻想の中のあの人以外、周囲に現存する人たち皆を見下すことで、危うく保たれているものであった。計画遂行のためとはいえ、馬鹿と見下すBと行動を共にするにはほとんど嫌気が差していた。Bがうれしそうに持参する母の手作り菓子を疎んじたのは、母子一体化した自己愛世界が幻想にすぎないと脅かされるのを避け、かつ、その一体化幻想がすでに失われていることを否認するためでもあっただろう。Aなりに精一杯、我慢してきたのだ。

計画に成功した今、もう我慢して馬鹿をおだてあげる必要もない。仲良し親子を見せつけられることとおさらばだ。達成感による高揚と頂点に達した慢心、そして安堵と弛緩。つい本音が口か

ら漏れてしまったのだ。「失敗作」。この語がBに母殺しをさせた。AもBも、「成功作か失敗作か」の択一しかない結果評価の一線上にしか足を置くところのない、あやうい自己愛の上を生きていたのだ。

殺しに成功したと思っていた女兒が実は気絶していただけであり、失敗した殺人をBが成し遂げたのだと告げられる逆襲を受け、自己愛の傷ついたAだったが、担任から復讐としてHIVに感染させられたと聞き、狂喜する。これで実母の憐れみを堂々と受けることができる。悲劇の主人公として、少ない余命を実母とともに研究に生きる、そのために実母の勤務する大学に入るのだ。その夢のもつ張り合いが、クラスメートからの「殺人者への制裁」としての激しいいじめをも耐えさせた。

ところが血液検査は陰性で、HIVには感染していなかったことを知る。その事実を共有することとなった女生徒から、実母に会いに行こうとしない臆病さを指摘されるや、彼女を殺す。実際、実母からの愛を自ら求める行動をAは起こすことができないうでいた。女生徒の言うように、電車を乗り継いで、実母がいると分かっている大学を訪れればよかった、それはたしかだ。しかし万一拒絶されることを恐れてか、あるいはもっと、あくまで母から手を差し伸べてほしく、自分から愛情を求めること自体で自己愛が揺らいでしまうからか、現実を避け、空想世界を強化していたのだ。女生徒から凶星をつかれ、逆上し、否認と怒りから殺害する。ちなみにこの間Aは、実母が会いに来てくれないことからくる喪失感を「まじめすぎる彼女には」実子と会っていけないという約束が足かせなのだ、と実母を美化することで否認していた。

それでもAは、殺した女生徒の指摘を否定せんとして、実母に会いに、勤務先の大学におもむく。現実と向き合うには、殺害が必要だったのだろうか。しかしそこで、実母が同僚と再婚し、新たな子を宿していたことを知る。「彼女にとって邪魔だったのは、子どもという存在ではない」ことを知る。他の誰でもないAそのものだったのであり、実母にとってのAはもはや、過去になっていたことを思い知る。

自暴自棄となったAは、必ず衆目を集める形での大規模な自爆自殺を学校で行うことで、万能感幻想を保護したまま、全てに幕を引こうとする。実母への復讐といいながら、「大量殺人」と銘打っての、それは、しかし、拡大自殺であった。「彼女に己の犯した罪を知らしめ」と言いながら、「魂の叫びを彼女に届けてほしい」と願っている。

最後まで、幻想の中の実母との一体化した万能感世界を取り戻すべく、「取り引き」として行ったのだ。自殺するから、自分を罰するから、かわりに僕に謝って、と。怒りと他罰とを伴いながら。

爆弾のスイッチを押す。しかし爆発は起こらない。ことのすべてをWeb上にさらしていたことで元担任が計画を知ることとなり、爆弾の設置場所を移したのだ。実母の研究室に。その瞬間Aは、酔慕して止まなかった実母自身を、自らの手で、職場もろとも爆死させたのであった。

やはりまず、片田の所論が語り得るところが大きいと感じる。幻想的で母子一体化した万能感の世界と、その喪失に対する否認としての幻想世界の肥大化、そして暴走する他罰とが基調をなしている。

芹沢ならば、誰かを責めるのであろうか。初報によれば爆弾を移送したのは元担任だ。Aは殺そうとして殺したのではなく、元担任のあくなき復讐心によって殺させられた、Aは被害者なのだ、そう言ってまずは弁護する。ついでAの家庭環境を続報から断片的に知るごとに、「せっかく心の居場所を見つけようとしていたのに」と、実父と継母の行いを責める。Aの「遺書」には同情するが、「実母の自己実現を責めることはできない」として、「やはり悪いのは実父と継母だ」する。そのようなところであらうか。

たしかにここにも、一理は、ある。実父と継母がAをていよく遠ざけてしまわなければ、こんなことにはならなかったのかもしれない。

けれどもやはり、語り得ない部分が残る。

芹沢の視点からするならば、殺しが向かう相手は実父と継母になるはずではないか。居場所から占め出した彼らに復讐するはずではないか。そうないないのはなぜか。語り得ることができないのである。

肝腎の実母殺しに至っては、偶発的な結果としか読めないのではなかろうか。爆弾を移設したのは元担任なのだ。Aの意図ではない、として。

しかしながら、最終章末尾、「これが本当の復讐であり、あなたの更正の第一歩だとは思いませんか？」と元担任がAに放った一言は、単なる巧妙な復讐を超えた、真実的的を射た感覚を残す。これはいったいなんだろうか。これを語り得ねばならない。

「あなたにとっての本当の本心は、ヒロイックに自殺して実母に後悔してもらおうという、結局最後まで実母を美化する甘えではなくて、実母が嫌い、自分は捨てられた、惨めだ、自分を捨てた実



母が憎い、と認めることから始まるのではないですか」との語りが聞こえてくる。Aの「遺書」と、それは、響きあう。母殺しという結果とも。

喪失を認めることが課題であること。これも実は、片田の所論に存在している。否認せず、きちんと怒り、きちんと抑うつすることだ。

それがなぜ、Aにはなされなかったのか。これも片田の所論で語り得る。父の不在である。「際限なく肥大化する自己愛的万能感に歯止めをかけ、子どもの目を外に開かせることもできるようになる」とする「父性」、これと出会う機会を、Aはたしかに欠いていた。

一度は機会があったかに見える。近所の人虐待に気づき、実母が去り、実父と継母との3人で暮らしながら、その中に溶け入ろうとしていたときである。けれども一連の出来事の中で実父が主導権をとったことは、実は一度もないのである。虐待に気づいて通報したのは商店街の人である。介入、措置したのは法的機関だ。実母は自ら黙って出て行った。そして後妻が我が子を宿すや、Aへの説得を後妻に任せてAを目に付かぬところに遠ざけた。「歯止め」「目を外に」ということを、この実父に期待できただろうか。

Aはひたすら実質的に、「父不在」を生きてきたのである。

ここまで見てくると、Bもまた、「父不在」であったことが思い起こされる。Bの母は、夫の仕事に支障が出ないようにと、家の中の揉め事などを一身に背負い込み、夫もそれに甘えたのか、家の中の異常事態に、あるいは気づきさえしないのか、関与した形跡がまったく見えない。Bの母は、かなり事極まってから夫に相談しようとするが、残業で会社に泊まると言われただけで、相談をあきらめてしまう。元担任の娘の死にBがかかわったと知った時点でも、夫には黙っておこうとした母である。賠償金の心配から仕方なく夫に明かしたものの、「警察に報告した方がいい」と言われるや、「男親はこれだから困ります」「私が守ってやらねばなりません」と阻隔する。Bもまた、父不在だったのである。

するとどうなるのだろうか。父不在だから、母を殺した、という共通の図式の成立を仮定せねばならないようにまずは思われる。先に問うておいたように、2少年を共通に動かしたのは、単なる万能感ではなく、父不在という共通因子がかかわってくる、そのような万能感のようである。けれども簡単に、父不在から、万能感を経て、母殺しへと直線を引けるものだろうか。父不在はたしかに、

万能感の統御を困難にする。しかしそれがなぜ母殺しへとつながるのか。ことをつなげる語りに至る学知には、意外と簡単には行きあたらないのである。語り得る学知はあるのだろうか。

そしてまた、もう一つの父不在と、それに連なる事件を忘れてはならない。

そもそも最初に殺された少女は、元担任が、「世直しやんちゃ先生」と世間に知られる熱血教師でもある内縁の夫との間に授かった子である。しかし内縁の夫は、結婚を望んでいた相手との間に子が授かったのを知って喜んだのもつかの間、ついで行った健康診断で自らのHIV感染を知り、結婚することを断念したのである。子どもがHIV患者の子であると知れたらいじめられる、として。我が子の前には決して現れまいと決意し、余命を欠けて教育に邁進する。この悲壮の裏にも自己愛と万能感のにおいがしないであろうか。

涙を飲んで元担任はシングルマザーとして養育する決意をし、様々な託児を利用しつつ育児と仕事を両立させるが、託児先の事情でやむなく保健室に子どもをあずけていたことが、事件の発端になっていたのだ。もしこの少女にごく平均的な父親がいたなら、こんなリスクな状況が生じる環境を放置していたであろうか。

内縁の夫は、それでもさらになお、少女を殺した生徒たちを、元担任の復讐の手から守ろうとした。HIVに感染した己の血液を元担任が採取し牛乳に混ぜたのを、あとでこっそり新しいものと取り替えていたのである。「憎しみを憎しみで返してはいけない」「それよりも、彼らはきっと更正することができる」と言っている。つまり彼は、最後まで教師として生徒を守る方を選んだ。父親として妻の気持ちを何とかしてやる方の道を捨てて。ここにも「父であること」からの逃避が透けて見えるのは思いちがいのだろうか。「彼を許すことができませんでした」。元担任が述懐するのも自然なことである。

そして「彼に守られたあなた方を許せるはずがありません」として、新たな復讐へと動いたのである。新担任を操って、不登校となったBには強引な家庭訪問を続けさせて追い詰め、Aに対してははじめとしての制裁ごっこがエスカレートするような指導を行わせた。

死んだ少女も父不在であった。父不在ゆえに我が子を失った元担任は、復讐の鬼とならざるを得なくなったのである。皮肉であるが、そのプロセスの随所で彼女は、少年たちへの「歯止め」「外への目」につながるようなプロンプトを、結果と

して発している。「自己陶醉する子どもの愚かしさ」「好き勝手にすることは、これ以上許せません」。娘が負った「父不在」。その娘の死で行きどころのなくなった「父性」が、この女性に知らずに背負わされていた、そう読める。

そしてAもBも、母を殺した。復讐の完結。

3つの父不在が、復讐劇の全体をセットし、かつ、引き金を引いて、全てを終えた。

しかし、である。ここが本当に終点なのだろうか。

不本意に元担任が背負わされた父性が、罰として母殺しをさせたのだ。それで語り終えられるであろうか。

それは片田にも不本意であろう。この部分はさらに検討せねばならない。

## 6. 外的現実の限界

今一度、芹沢と片田の所説を顧みる。

芹沢は、あくまで甘え、依存を受け止めることを説く。

しかし、たとえば光本（1997）が言うように、依存を際限なく受け止め続けていくなれば、保護してくれる者へのイメージがどんどん肥大化し、保護の失敗や限界を許すことができない心性もまた、肥大化していく。すると親や社会に対する恨みを抱え続け、さらに大きな何事かを引き起こすことになっていく。無際限な受容は、更なる地獄の反復への第一歩なのだ。

むしろ、肥大化した保護者の像が一種の錯覚であったことに気づき、現実的で等身大の保護者像へと縮小することが重要である。保護の限界を許容できるようになっていくことで、現実的な人間関係の中でも互いの限界を許容しあうことができるようになるのである。

芹沢の所説は、事件等の一応の説明をなしているかに見えるが、本質を突いていないどころか、むしろ、事態を悪化させかねないものであると言わざるを得ない。

この点、片田は、「対象喪失」を論の軸に据え、「死の五段階」に相当する喪失受容過程の重要性を説いており、光本等の所論とも一致する。両者とも、精神分析に学んだ部分をもっている。当然といえば当然である。

その所論に沿うことで、AやB、そして母たちの言動についてもある程度語り得ることは見てきたとおりである。

焦点である母殺しの要因についても、多くの事例を検討しつつ、父親が不在、ないしは無力な場

合が多いとし、父の不在と母親殺しの関係に目を向けている。

片田の所説にしたがうならば、母子密着に切れ目を入れて、肥大化した自己愛的万能感に歯止めをかけ、子どもの目を外の世界に向けさせる存在としての父性が重要であるのだが、それが希薄なとき、子どもは母の欲望の中にとらわれ自らの欲望をもつことができず、とらわれたままだからこそ、支配からの逃避としての「母殺し」を行う、ということになる。

けれども本稿の議論においては、二つの疑問が残らざるを得ない。

第一にまず、AもBも、支配から逃避しようとはしていない。支配とも感じていないし、逃避しようともしていない。近くにいることを望んだ行動にしか見えない。

そして第二に、Aの事件もBの事件も、見かけ上の猟奇性にもかかわらず、どこかにありそうなこと、自分の近く、あるいは自分の身におきすることも決してありえなくはないこととしての内的現実感を、私たちの心に残す。これはなぜか。

「こんな小説は他人事、作り話さ」と思いたい者は思おうとするのかもしれない。彼ひとりには「怖い」と思わないことにできるのだろう。けれども現に、多くの人に何らかの恐怖を伴う内的現実感を、単なる恐怖にとどまらない何かとともに残すからこそ読まれたわけである。

片田の「母殺し」論は、あくまで事件や症例という、ある種の特徴をもつ一群についての説明、に終わっている感がある。「告白」が多くの人に引き起こす内的残響の中で、「父不在」が「母殺し」につながるということが、ある種の実感を伴う普遍性にまで届こうとしている次元を語る言葉にはなっていない。

精神分析にも学んでいる論者にふさわしく、別の箇所では男子の対象喪失への弱さに触れつつ、エディプス・コンプレックスを解説する。母は父の「お嫁さん」であり自分だけのものではないことを受け入れ、母からの愛を独占することを断念し、「お母さんの愛の対象であるお父さんのようになろう」という願望をもつことができる、というものである。しかし現代では父親の存在感が希薄であるので、断念ということができないのである、と指摘する。ここでは普遍性が意識されている。断念と殺し。かなり接近してきているようにも見える。

けれどもあくまで普遍的な断念は、自ら（の一部）を断つことである。他方で殺しは相手に向か

う行為であり、一群の者が行う偏畸した行動である。片田の文脈が語りえるのは、ここまでである。両者はつながることがない。

もしつながる次元があるとすれば、どこであろう。

自らを断つことで「大人になる」ことと、相手を殺すということが、普遍的につながりあう語りの次元。

母子は確かに一体になっている。自分も死に、相手も死ぬ。しかし外的現実の語りにある限りそれは心中であり、現実の自死になるので人生はそこで終わり、大人になることはなくなる。

外的現実ではないのである。この語りが成立するのは。

残るは内的現実しかない。自分も死に、相手をも殺し、そして、大人になることが成立するのは。

内的現実で、一体化した幻想を断念するとき、幻想の中の自己を殺すことになるが、同時に、一体化している母をも殺すことになる。しかし内的なことなので、現実の心身は生き続ける。

この文脈で、初めて両者がつながる語りが生じ得る。

結局彼を呼び出すことになる。意図的に彼を避けつつの語りを試みてきたが、結局語りきることはできなかった。

「また彼なのか」「結局彼なのか」。

しかし我々は、そんなにも彼を、彼の所論、を受け止め理解しつくしているのだろうか。永遠の結晶として不動の偶像に押し固めてしまえるほどに、彼から汲みつくしたのだろうか。あるいは過去の遺物としてしまえるほどに、まったく新たな深みへの道を見つけ得たか。彼はそんなに甘いだけの存在なのだろうか。

小説「告白」の父不在と母殺しをめぐる考察は、そのことの試金石ともなるように思われる。

彼。そう。河合隼雄である。

## 7. 河合が見据えていた次元

河合に登場願うとしよう (1977a, 1977b, 1978, 1980, 1983, 1992等)。

片田の語った部分について、河合はこう語る。

母子の一体感を破るものは父親である。子どもは父親の存在を通じて、「他者」の存在を知ることになる。一体感の多幸な状態を出て、子どもは他者と接していくようになるのだが、そのためには、そこに存在している規範を守ってゆかねばならない。父親を通じてこれを知る。したがって、子にとって父親は、社会の規範の体現者であり、

それを守らぬときは罰を与える怖い存在である。しかし、子が規範を守るかぎり、父親はそれを賞し、子が社会へと出て行くための知識や技術を授け、教えてくれる存在でもある (1980)。

ここまでは、片田と大きく違うところはない。この父性の役回りが結局、元担任教師になってしまったのだ。

けれどもたとえば母性の認識について、河合のそれは、「甘やかな」一体感などという、なまやさしいものではない。

彼は語る。子どもが自立しようとするとき、その母親がどんなによい母親でも、母親の否定的側面がにわかに意識されてくる。母親の親切は子どもにとって、自分を飲み込もうとするたくらみとさえ感じられる。あるいは迫害的にさえ受け取られる。つまり、母性が自我の確立を迫害するかのよう感じられるのである。

母親の期待に縛られるというような程度ですむ内的現実ではないのである。母性の方から、子を飲み込みに来るのである。

Bの、母への思いを、思い起こさないであろうか。彼はたとえば、母子一体化した万能感を守るために母が学校にクレームをつけることを嫌う。なぜだろうか。BはBなりの現実的な社会的評価軸を手にしつつあり、成績優秀者を素直にすごいと思って拍手した。しかし母は、Bが優れていなければならない、それも、母の願いに応える形での優れ方でなくてはいけない、と示したのだ。Bは言う。「嫌だった」。母がBを飲み込もうとしたのである。

では母は、自ら自覚して「飲み込もう」という判断と意思で行動したのか。Bはあくまでやさしい子であるという否認も、学校などへの他罰も、そして最後に「警察に行く」というBの外的現実への降り立ちを封ずる心中を「やり直しなんてできないの」となさしめたのも、母自身の意思と判断といえるだろうか。意識的には「これからはいいことばかり起きるのです」だったはずのことが、「失敗してごめんね」ということになってしまった。どうしてそうってしまったのか、熟慮する余力も残らぬままに、ふらふらと何者かに引かれるように、心中しようとしたのである。熟慮の上の選択ではない。動かされたのだ。個人としての母親を超えた普遍的な存在として、我々人類が共有する (1977a) と河合が指摘する「母なるもの」。それにのっとられ、つき動かされて、飲み込んだわが子もろとも飲み込まれて消えていこうとしたのである。この視点も、片田にはない。



河合でないと、語り得ない。

河合は言う (1978)。多くの若者は母親に対して、無際限の援助を要求し、それを当然とする一方では、母親を圧迫者として攻撃しようとする。このアンビバレンツ (相反性) に耐えられず、母親に暴力を振るうような子どもが増えてきたことも事実である、と。

そうなのだ。Bは圧迫者としての母親を攻撃したのだ。B自身がもがいて抜け道を自分で見つけようとするたびに、その道を塞ぎ、Bと向き合わずに一方的にコントロールして飲み込もうとし、外的現実而降り立とうとする最後の決意には、共に死ぬことをもって飲み込みきろうとした母親。この母親に、刃向かったのだ。これもB自身の自覚的熟慮による意思的選択などではない。片岡が言うように逃げようとした訳でもない。ただ、選ばされたのだ。Bの意識はひたすら当惑するばかりであった。Bを動かし、殺しにまで至らしめた力の作用があったのである。

河合は続ける (1977b)。子どもは成長にともなって、その「母なるもの」の否定的側面—すなわち自立を阻む力—を認識し、それと分離しなければならない。ここに、成長の一段階としての母親殺しの主題が生じる、と。

人間の内界に普遍的な響きを共鳴りさせる、昔話を検討した文脈での語りである。母親殺しの主題とは、昔話「ヘンゼルとグレーテル」を素材とした考察において、「魔女殺し」の象徴的意味として登場したものである。したがって普遍的には、自立のための、分離のための母親殺しは、あくまで内界において行われることであり、実際の母親に向けられるものではない。

母殺しはこうして、基本的に内的現実の世界で、象徴でもって行われる。「成長に伴う母殺し」というテーマが、人類には普遍的にセットされているのである。問題は、この力の行方である。

かつては、宗教的なレベルにおいて母の否定が象徴的儀式で行われた。宗教的儀礼によって守られていた人々は、象徴的な母の否定が行われた後に、わざわざ実母と血みどろの戦いをする必要がなかった (1980)。未開社会においては、共同体によるイニシエーションの儀礼を通じて、それが集団的に行われていた (1983)。

現代においては、個々の人間がそれを行わねばならない。個人で象徴的にこれを行うことができるならば、実際の親を本当に殺す必要はない。

ところが、来世における極楽や地獄の存在を否定してしまった現代人は、この世に楽園を築こう

として、逆に家庭の中に地獄を体験することにもなっている。子どもたちは何の宗教的知識も守りもないままに、日常生活の中で、時に「観音様」のような包み救う母性、そして時に「鬼子母」のような喰らい尽くし飲み込み尽くす母性に遭遇することになる (1980)。「イニシエーションの儀式を無くしたことが近代社会の特徴なのであるが、そのことの意味について我々はあまりにも無知であったので、すでに述べたような青年期の問題を抱え込むようになった、ということもできる」 (1983)。しっかりとした伝承に支えられた集団でのイニシエーションなしに、個人が内的現実の中だけで象徴的にこれを行うのは、とても難しいことなのだ。

こうして現代社会では、母殺しは、普遍的であり、かつ、外的現実のものとなってしまったのである。「象徴的に実現されないとき、そのエネルギーが爆発し、大変な事件が生じてくる。それが実際の殺人事件にまで至ることがあるのは、周知の事実である」 (1983)。外的現実における母殺しが、自立のため、分離のために、どこで起きても不思議ではない条件が整って、普遍的なものとなってしまったのだ。「告白」の母殺しが多くのものの胸に響くのは、そういうことなのではないか。

だとしたら。

だとしたら実際の母殺しにならずに自立していくための道は残っているのか。宗教的守りは、もはや普遍的には機能しない。かつて「イニシエーション」をキーワードとした新興宗教が知的な若者を魅了したのは、イニシエーションの意味についてあまりに無知な社会に生れ落ち、しかし、普遍的にイニシエーションを求める心性について彼らなりに真っすぐであったがゆえであっただろう。しかし実際には、それらはまったく機能せず、破壊しかもたらさなかったことは、周知の事実である。「容器の中で勝手気ままに動いていた人間が、容器としての母性を破壊するならば、新しい何者かをそこに容器として見出す努力をしなければならぬ」。事件の10年以上前に河合は喝破していたのである (1978)。

では我々が見出さねばならぬ容器とは何であろう。求められるのは、厳しい父性に支えられた自我であると、河合は言う (1978)。

ここでも現代人は決定的なものを失っていることをころせねばならない。

イニシエーションが機能した社会では、儀礼の中の「父祖見参」と呼ばれる段階において、修練者たちが、父祖たちあるいは原初の神の姿に接し、

その部族に伝わる宗教的伝承を教えられていた。

けれども近代社会はこれらをまるごと否定してしまっただけでなく、「父性の不在が分離と自立を困難にする」という片田の諸説も、背景にこのような状況があったことにまでは言い及ぶことができていない。

片田は、かつての大家族や村落共同体においては、実父以外のさまざまな男性が父性を担っていたのだとする。しかし、核家族化がすすみ、父親は通勤で不在のことが多く、そもそも父親ひとりではなせる父性ではなかったのだから、現代の子どもは十分な父性に接することができないのだとしている。

対して河合は、宗教、儀礼、象徴としての父祖や原初の神を失ったことが決定的だとする。

どうなのだろうか。実際のところ、片田の語るかつての大家族や村落共同体なるものは、父性を体現していたといえるのであろうか。

河合は指摘する(1980)。かつてわが国の一般民衆は、たしかに大家族制度をもっていたようにみえる。すべての家族構成員がそれぞれの能力に応じて家業や家事を分担していたのかもしれない。しかしそこは「絶対的な権威などはなく」「共同的な雰囲気が支配」している世界だったのだ。「各人がうまくバランスが取れて存在しているという感情」にこそ、本質があったのである。

明治維新後、国家の統合性の観点から、「家父長を中心としたまとまり」を表向きにはもつようになった。しかし、これは二重構造であり、「基本構造としては、あくまで母性原理が強かった」のである。「みんな」が大事であり、「調和」が最重要で、「平等に包み込む」原理で成り立つ家族であり、共同体であったのである。対外開戦の決でさえ、「空気」がなさしめていたではないか。

つまり、維新前後を問わず、大家族とその成員は、母性原理で動いていたのである。それらが集積し、結果的に掟、決まり、規範、社会秩序、法、理念、理想、伝統、などを子供に与える形にみえたとしても、与え方や、守らせ方が、母性原理によるものであったのである。「みんながそうしているのだから」「世間様に恥ずかしくないように」という用語に頼った訓育であった。まぎれもなく、母性原理の言葉である。規範の責任を自分個人に負おうとしない、逃げ道のある言葉である。

ここに戦後、家父長的権力を嫌い「民主的」な雰囲気を意図する政策が採られたのだが、これはむしろ、ただでさえ外向けの形だけだった父の権威を全く取り去り、わが国の家族のもつ母性を

より前面に押し出す結果となった。そして今に至るのである。

片田が、かつて機能した父性が機能しづらくなったのだと論じるのに対して、河合は、本当の父性が機能していたことなどなかった、と喝破するのである。「世直し先生」と知られた熱血教師でさえ、内縁の妻の子の父となることから逃げたのだ。

この相違は、「では、今の状況に、どう対していけばよいのか」というところの相違に、如実に現れる。

片田(2008)の出す「処方箋」は以下のようなものである。まず、父親が自分の生き方を示しながら父性を発揮するべきところだが、これを、1人で行うのは膨大な時間とエネルギーを要するので、ネットワークで行うべしとする。自身の欲望に気づき過度の期待は禁物とする。夫婦の絆を強め、母子密着も禁物とする。「抑止力」を高めるために、親以外との人間関係、特に同一化のモデルになりうる同性との関わり、子どもの多様な人間関係を尊重する。危険信号を見逃さず、何でも早めに相談し、社会や地域全体で子どもを育てる、というものである。

整った言葉である。通りもよい。しかしこれらに、内容は伴っているであろうか。自身の欲望への気づきは、これはたしかに重要である。しかしたとえば、夫婦の絆を言うのなら、このことのもつ困難と深みに触れずに何かがなせるのだろうか。少なくとも、「男と女という象徴性の問題」「現代におけるセクシャリティの困難」「ジェンダーをめぐる諸問題の錯綜」に触れることなく簡単に「夫婦の絆」と唱えただけでは、処方にならない。子どもと密着せず独自の対人関係を尊重し、かつ危険信号は些細なものでも見逃さない、とは矛盾ではないか。些細なことでも見逃さないということ自体がすでに、密着である。そのことならBの母親が一心に実行していたではないか。ネットワークや地域といった言葉は聞こえはよいが、無内容である。それらを責任あるものとして、どのように作ろうというのだろうか。ネットのどこに明確な責任の所在を求められるのか。結局その作業自体にも、「膨大な時間とエネルギー」を要するではないか。それでいて責任を引き受ける覚悟から腰を引いていくのもたやすい。実現性のある見通しが描けるのか。

さすがにこれでは無内容に過ぎると考えたのか、「死の五段階」を踏まえた「処方箋」は、厚みを増したものとなっている(片田, 2010)。子どもが変化していくとき、失われていく対象、という

事実を直視すること。特に親自身が自分の不安や恐怖を直視すること。また、悩みや葛藤があってこそ人並みである、と負の感情を認めること。そして断念することの大切さを知ること。これらを通してはじめて、敗者への思いやりや弱者への共感をもつことができ、地に足の着いた目標、着実な努力、「大人の振る舞い」、だめなものだめ、という歩みができるようになる、というものである。

これにはかなりの説得性がある。重要なのは、「死」に関する理論を援用した点である。喪失の直視、断念、負の感情、不安や恐怖の直視。これらは「死」と向かい合うことで、はじめて得られるものである。負の感情のありかを重視する点などは、うつ病が蔓延している現代社会に対して、大きな問いを投げかけているともいえる。「死」と向き合う視点の導入が大きい。

けれどもこれらのことを、実際に体験可能にする力と構図を私たちは手にしているだろうか。かつてのイニシエーションは、まさに、死と再生の体験であり、喪失、断念、恐怖の直視に満ち満ちていた。そして重要なことは、象徴性を伴った神話世界がそれらの全体を支え守っていたことである。それがあったために、その守りによって、一人ひとりとは強くない人間の男性でも、それらを体験させる儀式を執り行うことができたのだ。

現代社会で直にこれを求めると、「死」や「恐怖」を玩具の如くに弄する幻想の中での猟奇的世界の形成に往々にしてなってしまう。ITの発展と普及がその規模を爆発的なものにした。「告白」においても、Aのサイトや幻想世界をはじめ、付随のエピソードの随所に、そのような怪物的な世界が顔を出す。

それらは一見、言語上では、喪失や断念を語り、負の感情に満ち、不安をさらし、恐怖に彩られる。けれどもそれらはAが見事に示してしまったように、母子一体化した万能感的幻想世界の中から一步も出ずとも、「できていることにして」しまえるものなのだ。

片田は、子ども自身が「転ぶ経験」が大切であり、「転んだときに他人のせいばかりにしない」「敗因を分析する」「自分で起き上がる」の三つの練習を子どもに積み重ねさせることであるとしているが、これとて、Aのような幻想空間で、「あたかもできている」ようにすることができてしまう。実際A自身、ヴァーチャルに「できている」つもりになっていただろう。自分を高めているつもりだったであろう。

片田の限界はここにある。かつての世に求めたくなってしまったノスタルジック的父性もまた片田の幻想だったのだ。この甘さが、処方甘さに出してしまうのだ。

では、河合ならばなんと言うのだろうか。

第一にまず、父親が鍵だとしながらも、そもそもこの国に強い父性など一度も存在しなかったことに断固として立脚する。父親が父性を発揮するには、相当に厳しい覚悟を、日常の「こんな小さなことに」と思えるようなことに至るまでもつ準備をしておかねばならない。

不登校の少年の事例がある(1992)。彼が父親に、高価な物品をねだる。家計で容易に購えるものではない。しかし彼は、それを買ってくれなければ、学校に行かないという。無理難題である。このようなとき、彼は無意識に強い父性との対決を求めているのである。けれどもこの国の文化では父親もまた強い母性を生きているために、無理をして息子の願いを聞き入れてしまう。子どもとの対決を避けて、高額物品を買ってしまう。経済的には大変かもしれないが、お金を使うことによって心を使うことを逃れるのである。しかしこの態度がある限り、子どもは嬉しくもなんともないのだ。強い父性を求めるのに、母性にのみ出会うので、たまらなくなる。「うちの父は何度機会を与えてやっても、父親になるのを逃げてばかりいる」。一番欲しいものがもらえなかった深い失望を味わい、結局は登校できないままになる。

では道はどこにあるか。別の事例では、このような無理難題にあたって父親が、思い切って自分の給与明細を子どもの前で広げて見せ、その目にさらした。自分の収入はこれだけしかないこと、これっぽっちのお金を得るために、どれだけ下げたくない頭を下げ、喉元まで出かかかった文句を飲み下し、屈辱や冷遇にも耐えながら、地味な仕事に打ち込んできたのか、語って聞かせたのだという。すると、息子が登校するようになった。この父親は、深いところからエネルギーを使って対決したのである。

しかし、「あ、じゃあ、息子には、自分の仕事上の苦勞を語ればいいんですね」と短絡する者は、猿真似にすぎず、エネルギーを全く使っていないことになり、何もなすことができない。

ことは、かくまで個人に任されているのである。

仕方がない。神の下にある時空を拒否して個人の権利と自由を選んでしまったのだから。責任は個別に負わねばならない。逃げず、避けず、深いところから、自らを絡め取っている母性原理とも



戦いつつの対決をしつづけるしかないのである。

この覚悟、この厳しさが、河合である。片田には、ない。ネットワークなど、逃げと相互慰撫の場にたやすく転じてしまうものだ。そもそもわが国でネットワークと言う場合、やはりそれは、母性原理が支配する場になってしまうのではないか。そのことを自覚していない限り、父性の役に立ちほしくないだろう。

第二に、対決そのものがどれほど厳しいものであるのかを、より深く知ろうとすることである。

先の事例なども踏まえつつ、河合は言う。

もし仮に、日本の母性の強さを嘆き、西洋の父性の強さを範とすべきとするとしても、実のところ、西洋ではすでに天なる父による統合に対して、強い疑問が生じて久しい。このことをまず知らねばならない。近代の国民皆教育における学校の構造は、学年、学級、指導要領、成績評価、などの西洋近代の西洋的父性にもとづくシステムが相当に内包されているのだが、いまや機能不全である。だからこそ、惨劇の格好の舞台ともされるのだ。

西洋の父性まで頼りにならない現代、われわれはどこに父性を探せばよいのだろうか。

しかしまず、この状況認識の透徹が重要なのである。

この状況の中、河合は、映画「自転車泥棒」の筋書きをなぞりつつ、生活苦の父子家庭が不運の中をも誠実に生きようとしたが報われず、たまらず悪に手を出した瞬間、父が警察に捕まってしまった、というシーンを描き出す。このときに、何を感じたのか、息子は父に、寄り添うのである。

先の不登校生徒の父親の場合と同様である。「存在の根っこまでぎりぎりに追い詰められた人間が、全存在をかけて行為するか否か、という次元」で対決することなのだ、と河合は言う。そしてそれは、しばしば、外見的には見栄えの悪い、惨めに見えるようなものとなるであろう、と予告する。しかし、そこに、全く頼りのない存在として、自分の全存在をかけて子どもに対するより仕方がないのである、と言うのである。

全存在をかけるとは、たしかに、権威の座に居座ることではない。いかなる権威も実ははりぼてである。現代社会の混迷を生きる覚悟を、親世代の想像する以上に固めている子どもたちは、とうにそのことを見切っている。そんな見せ掛けの権威などほしくもない。対決しても馬鹿馬鹿しいだけである。Aが語ったとおりであり、元担任が嘆いたとおりである。「道徳観念など、単なる学習効果でしかない」。「あなたはどんな罰を受けても、

それを罰とは感じないはずですよ」。実際、底の浅い熱血の新担任は、事件後のクラスに対して何もできず、AとBを追い詰めようとする元担任や生徒集団に利用されただけであった。「先生が愚かな自己顕示欲さえ示そうとしなければ、この悲劇は起こらなかったはずですよ」。

そのような大人なら、掃いて捨てるほどいるではないか。安全圏の高みから、「かわいそうな」現代の「ひ弱な」子どもたちを見下して、何とかして彼らの「暴走」を「止め」、「心の闇」から「救い」ださねばと、いきり立ちつつ、自分から降りていくことはない、まして惨めな姿をさらそうとはしない、惨めな姿がありうるとさえ思わない、しかし内心では「自分たちの世代は何とか逃げ込めそうだ」と思っている、その安寧を貪ることから決して動こうとはしない大人たち。彼らのようなあり方からは、現代を生きる子どもに届く父性など得られようはずもない。

父性を創り出す基盤となるのは、定職があるかどうかというような問題でもなければ、持ち家があるかどうかでもない。地位や正義でももちろんない。仕事ができるかできないか、そういうことですらない。「成果主義」などといいながら、結局人間を正当に評価することのない社会の中で、常に足元の揺らいでいる、覚束ない我が姿のまま、わが子の前に立つしかない。

AもBも、「自分は成功作なのか、失敗作なのか」との短期結果主義的で短絡的な二者択一に自尊心を賭すような、危うい場に脚を置くしかないものたちであった。そこに本当に届きたいならば、自らの足元もまた危ういことを否定せず、素足でその地平に降り立って、フェアに対峙するしかない。

父性を体現しようとする親にもとめられる覚悟とは、ここまで厳しいものなのである。

そして第三に、このようなことすべてに、「限界」というテーマが突きつけられていることへの深い体験知が必要だと知ることである。片田も「断念」と言っている。「直視」とも言っている。ここでは河合ともかなり響きあう。

しかしどうなのか。何ゆえの限界かについて、見切ることはできているか。見据えることはできているか。

容器としての母性を破壊し、勝手気ままな状態を脱し、新たな何かを見つけるには、厳しい父性に支えられた自我がその役を果たすことになる。前記のとおりである。そしてそのような自我の特徴は、己の限界を知っていることである。片田も

述べている。

しかしここに難敵がいる。またしても母性原理である。母性は「限界」をきらうのだ。ゆえに、限界ということは日本ではきらわれる。「なせばなる」「何とかなる」「至誠、天に通ず」。ならなかったそのときは、「夢をありがとう」と横断幕を掲げればよい。「失敗」の存在しない国。限界の存在しない国。

けれども、母性に挑戦するならば、その人は、自我の限界を知る痛みに耐えねばならない。片田の「断念」も、限界に言及しているかに見える。しかし河合の語るそれは片田の言うような単純なあきらめではなく、常に戦い続けたもののみが、自ら知ることができる限界である。「自分は何ができないか」という認識の透徹を求めているのである。幾度となく手痛い目をみて思い知った、そのような血みどろの限界なのである。

片田は、限界を認めさせない社会の問題をも指摘している。「夢をあきらめるな」。教師も歌手もキャスターも、知識人まで口をそろえる。資本主義では消費が大事だからだ、と片田は解説する。提供される商品やサービスは必然的に、死や病、痛み、不快を排除するように発展してしまうので、対象喪失への免疫力が低下し、「自分だけが悩んでいる」と錯覚してしまう。BやBの母のように。

この「自分だけが悩んでいる」感覚は、特権的優越感に容易に転換する。Aのように。

近年は父親の育児参加が美とみなされ、「イクメン・グッズ」が花盛りであるが、これらも不快除去商品である。育児参加する父親は、片田が指摘するように「二人目の母親」のごとき、さらに母性的な存在として参画する。

けれども河合が言うように、そもそも資本主義のはるか以前から、私たちは母性原理に支配され、限界を嫌って生きてきたのである。女神アマテラスを皇祖とし、けがれなき神国日本を引き継いできたではないか。いかなるケガレも祓えば即座にキヨメられる。なんと万能な、限りの痛みを知らずに済む世界だろう。我々はそれを骨の髄まで生きてきたのだ。

この深みまで見通さなければ、この課題への挑戦も、容易に頓挫する。しかし頓挫はまた「痛み」でもあるのだから、目をそらさず見すえながら「戦い続け」ることである。そもそも万能感や自己愛自体、もってはいけないという話では全くない。万能感や自己愛をもたずに生きてると自ら言うものがあるならば、むしろその者を信じていくことができない。精神科医の土居・小倉

(1995) も言う。自らの精神科医としての歩みを省みつつ、「患者を助けてやりたい」という万能感が刺激されることが、自然な始点であると語る。しかし、経験の中で「できそうだ」という気持ちと、「歯が立たない」という「ダイナミクス」をたびたび経験し、それを消化していく経験をつむことで治療者としての自らを確立してきたのだ、と。このことを解説して神田橋(1997)は、動因としての自然な万能感は、失墜することで技術の向上を導き、技術が向上することで復活する、このダイナミズムの繰り返しが重要なのであるとする。単なる堂々巡りではなからう。繰り返すごとに深まっていく、螺旋状のものなのであろう。

深みまで見通すことができているか、本当にできているかと常に問い続けることであろう。見通したという安寧ではなく。そのつどに。そのときやはり、私たちの足取りは覚えず、腰が引け、アゴを突き出し、よろめきながらの姿をさらし、それでも行かねばならないのであろう。

立ち向かい、戦い、追い詰められ、痛みを負い、外見は全く惨めであり、頼りない姿をさらしつつ、それでも全存在をかけていく。血みどろの局面も引き受けて。

私たちが父性を生きることができるとすれば、このようなことにびくつきながらも避けずに進み入る、それしかないのである。私たち自身がまずイニシエーションを生きねばならないのかもしれない。

そして、ここまでを語りきることができるのは、今なお、河合隼雄しかないないのである。

## 8. 河合のまなざしの先にあるもの

いかがであろうか。

このまなざしは、ここまでくるとき、もはや、鬼のそれである。

あるいは、鬼を見据える、まなざしである。

この、地獄的なまなざしにこそ、河合隼雄の本質があるのではないのだろうか。

彼を単なる、笑わせ上手でおしゃべり上手の、心理療法宣伝屋とみなしていたことはなかったであろうか。持ち前の聞き上手で人をたらしこんで人気を得た、大衆的心理学者にすぎない、と。

あるいはその人たらしでもって心理臨床職を売り込んでいく、政治屋としかみなさなかつたことはなかつたのだろうか。

そのように捉えていたのでは河合隼雄の何を捉えることもできないであろう。

ほんわかとしたファンタジーを語る、心優しい

子ども好きのカウンセラー、というのもほんの一端しか捉えていない。

すがりつく安らぎの故郷などでもない。

まして、守るべき権威でもない。守ってもらうなど迷惑だ、と泉下に思うのではないだろうか。守ってもらわねばならないような者ではないと。

もちろん忠誠を競い合う権威（その一端が平井〔2009〕の「はじめに」に活写されている）などでもない。その空虚な競い合い自体は、彼なら笑って放っておいてくれるであろうが、その行く末に關しては、地獄のまなざしをまじえつつ見据えているであろう。

私たちはまだ、彼から汲み尽くしてはいないのである。

ほとんど分かっていなかったのではないか。

時にそのように思われる。

「早くも、河合隼雄の神格化が始まっていますか?」。全く他領域の研究者から酒席で問われたとき、あいまいにに応じてしまったのが悔やまれる。

神格化も何も、そもそもまだまだ分かっていない私たちなのである。なおいっそう喰らいつき、むしゃぶり尽くすしかないではないか。

小説「告白」をめぐる試みは、そのような思いを新たにさせるものであった。

けれども彼の地獄的なまなざしを浴びることで、登場人物への語り口調が、なぜか変化してくるのである。これはどうやらたしかである。

Bは、飲み込もうとする母性と、何度も何度も戦おうと身構えていたのだ。けれども相手が大きすぎた。「母なるもの」に乗とられていたのだ。一人では封じ込まれる。本当に殺すしかなくなってしまった。そうなる前に彼の戦いを、徐々にであっても意味をともにしながら戦う誰かがそこにいたなら。

Bの母。のっとられていた張本人だった。日記に溜め込んだあの思いに、耳を傾ける誰かがいたなら。起きていることをどのように捉えることができるのか、さまざまな可能性を語り合うことができていたなら。

Bの父が父になれていなかったことを、誰が責めることができるであろう。本物の父性など昔からありはしなかったのだ。彼一人努力したとていかほどのものであれただであろうか。せめてそれでも、彼の同僚としてこの嘆きをともにして、彼の仕事を一時引き受けて、無力であってもよい、家族と向き合う時間をと、勧める誰かがいたならば。

Aの実父はどうか。責めたてるのは簡単である。

けれども、自分があの立場にあって、母を異にする二人の子ども、血のつながらない妻と長子、その間に立つ地獄を引き受ける覚悟をもつことができたであろうか。それができないその辛さを、商店街の仲間のひとりとして、せめてともにするのが関の山かもしれない。

継母はどうか。これを責めるのも簡単である。あまりに無邪気な印象も受けるが、実父が伝えるべきことを引き受けさせられた、そのときの当惑をともにできる誰かがいたなら。あるいは何の当惑も覚ええないような女性だったのか。Aの語りでは純真無垢な心性にみえたが、わが子を腹に宿したことが、彼女をそうさせてしまったのか。だとしたら誰に何ができただろうか。

Aの実母。本当に、家を出るや、Aを過去としてしまったのだろうか。かすかにでも残る思いから、何かを引き出せなかったらうか。そもそも家庭裁判所の職員は本当にあそこまでの措置が必要だと判断したのか。そこまでするような事案にみえない。「措置」そのものも、Aを捨てたい実母の作り話だったのか。しかし仮にそうだとすると、その思いまで責められる私たちか。

ともかくAもまた、単独者として描いた幻想世界としてではあったが、母性のファンタジーから抜けられないでいた。彼の思いに近づこうとする者は、なんらかに血を見て、時に命を落とすようだ。あの女生徒のように。誰も、寄ることもできなかったらうか。

そして元担任の女性。その内縁の夫にだけは、本気で怒りがわくのをどうしても禁じることができない。彼こそが自己愛に酔っていたのではないのか。その自己愛からすべてが発したのではないのか。正面から対決したくなる。「君のみじめさを生きずにどうする」と正面から物申すことができる、友人知人であることができたなら。結果として、止められたかどうかは、この際問題ではない。対決することそのものなのだ。しかしその問いはすぐに反転してくる。では自分は自分のみじめさを生き得ているか。

彼が父になることを断念した理由は、「そうしないと娘が将来いじめられる」という非常に母性原理的なものであった。彼が、父となることを引き受けない決断をした時点で、娘は命を失ったも同然であった。シングルマザーとなった女性教師は無理やり父性を担わされ、AやBが一人では母性からの解放に踏み出せないでいたのを、手助けさせられたのである。

こうしてことのはじめから、この物語は母性原



理の圧倒的優位による父不在が発端であり、けれど成長したくて父性を求める少年が、しかしまっとうな父性と象徴的にも現実的にも出会うことができず、母を本当に殺すしかなくなった、そのように動かされてしまった、その顛末の語りなのである。そしてそのようなことは我々の内でも起きているのだ。だからこそ多くの心をとらえたのだ。その地獄を見据えた河合のまなざし。

そこを通してみるときに、関係者への語り口調も変わってくる。

どこがどのように変わったか。自己言及の無粋は避けておきたい。そもそも自己言及ほど「語り損ねる」言語活動はないのだから。

それよりも書きとどめおきたいのは、河合隼雄の恐ろしさ、鬼へのまなざし、地獄を見据える目、その奥深い闇である。

「鬼」を自称する者に、本当の鬼はいない。見えない。名乗ることなく鬼を見ていた河合自身の鬼の姿が、死後ようやく、近しく磨がれたものたちの手で、明かされつつある今日である（谷川・鷺田・河合編, 2009, 中沢・河合編, 2009）。今のうちである。もっと、その姿を明かして伝えてほしいのである。生身に磨がれた者たちに。

わたしたちはまだまだ、何も汲み尽くし得てはいない。

これからなのだ。

なお本来、本稿の扱った諸テーマについては、たとえば、母子関係と象徴とについてであればクラインとその学派を、父と象徴とについてであればラカンとその学派を、宗教性や神話や象徴と個人の発達、および「人をつき動かす力」について（すなわち元型論）であればユングとその学派を、そして、内的現実と外的現実ということであれば、これらすべてとフロイトおよびその学派を、併せ論じ、整除せねばならない。

しかしこれでは、別に一書をものさなければならなくなる。

本稿はここで閉じざるを得ない。

これからなのである。

## 文献

土居健郎・小倉清 1995 治療者としてのあり方をめぐって 土居健郎・小倉清対談集 チーム医療

Elisabeth Kübler-Ross 1969 *On Death and Dying* Simon & Schuster, Touchstone  
(エリザベス・キューブラー・ロス 川口正吉

(訳) 1971 死ぬ瞬間—死にゆく人々との対話 読売新聞社)

平井正三 2009 子どもの精神分析的心理療法の経験 金剛出版

神田橋條治 1997 治療のこころ 第8巻 平成八年 花クリニック神田橋研究会

片田珠美 2007 こんな子どもが親を殺す 文春新書

片田珠美 2010 一億総ガキ社会 「成熟拒否」という病 光文社新書

河合隼雄 1977a 無意識の構造 中公新書

河合隼雄 1977b 昔話の深層—ユング心理学とグリム童話 福音館書店

河合隼雄 1978 新しい教育と文化の探求 創元社

河合隼雄 1980 家族関係を考える 講談社学術新書

河合隼雄 1983 大人になることのむずかしさ 子どもと教育を考える2 岩波書店

河合隼雄 1992 子どもと学校 岩波新書

湊かなえ 2008 告白 双葉社

光本和憲 1997 内省心理療法入門 山王出版

中沢新一・河合俊雄(編) 2009 思想家 河合隼雄 岩波書店

中島哲也 2010 「告白」映画化によせて 湊かなえ 告白 双葉文庫 Pp.301-317

芹沢俊介 2008 親殺し NTT出版株式会社

谷川俊太郎・鷺田清一・河合俊雄(編) 2009 臨床家 河合隼雄 岩波書店